

◎種子島家の
童児晴れ着
(大崎)

上西だより

～上西校区集落支援員だより～

西之表市地域支援課
上西集落支援員
馬場 信一 編集
連絡先090-9579-3953
上西校区長責任発行

健かな成長を祈る童児晴れ着

大崎の平原拓治さん宅に、子どもの晴れ着が代々伝わっています。

晴れ着の名前は「絹浅葱色袂付袖前帯付亀附岩三ツ鱗紋裏付童児晴着」。平仮名にすると「きぬあさぎいろ・たもとつき・そでまえおびつき・かめつきいわ・みつうろこもん・うらつきどうじはれぎ」と43文字にもなります。(まるで落語「寿限無」のよう…) 種子島家の子どもの晴れ着です。それがどうして平原家にあるのでしょうか。



種子島家の家紋 三ツ鱗紋

種子島家紋がこの紋のぶになったのは、初代島主信基と関わりがあります。

壇ノ浦の戦いで敗れた信基と母は鎌倉の北条時政に助けられます。

北条家で信基は養子となり、太刀一振（国宗作一鉄砲館に展示）と北条家の家紋であるこの紋を授かりました。



習わし

種子島家島主のお世継ぎに体の弱い子が生まれると、塩屋に養い親を頼む習わしがありました。

塩の持つ力でもってすこやかな成長を祈り、この服をあつらえました。

あらゆる生命の源である海から作られる塩は古代から、食料の腐敗を防ぎ、生活のなかでは貴重品でした。

塩は神道においては禊（みそぎ）や神事の場にも見ることができます。

拡大図



亀附岩の図柄

大崎は塩屋の集落

塩屋の家系のひとつである平原家に、この晴れ着が預けられたと思われています。



←塩屋ん下ん海

晴れ着はだれが着た？

江戸時代後期第23代種子島家島主種子島久道が幼少のころの晴れ着。

久道は寛政5（1793）年誕生。わずか4歳で島津齊宣の次女・御隣（のちの松寿院）と結婚。病気がちであった久道は文政12（1829）年に36歳で逝去されました。

童児晴れ着を実際に広げてみると、予想以上に小さいことがわかりました。貴重な歴史の証人となる童着ですので、今後は修復・保存・展示ができることを期待いたします。